
神の選択

かぼちゃ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

神の選択

【Nコード】

N6877Y

【作者名】

かぼちゃ

【あらすじ】

俺は自慢じゃないが妹以外と話せない
だけど何でこんなことになったんだ
目線が合うだけで腹がいたくなるってのに

俺の職業は

浅日香美の恋人

初任給は2000万

はたして俺は妹の病気のためにしっかり働くことが出来るのか!?

プロローグ

プロローグ

突然ですがお便り申し上げます

父さん、母さん、陽子へ

兄さんにも仕事が見つかりました

だから探さないでください

お金は通帳に入れます

話は変わりますが兄さん恋人が出来ました

兄さん泣きそうです

嬉しさからではないのですが

事の顛末をここに書きつづります

長くなりますが読んでください

~~~~~  
~~~~~

「私としたことが三枚もある手紙なのにジュースをこぼしたせいで最初の5行しか読めなくなってしまったわ」

「これは怒るわね」

しょうがないこのまま出してしましましょう」

「どうせあいつはここから私の許可なく出られないのだからわかるはずないもの」

超対人恐怖症 深見一樹

>二人目のerror 深見一樹<

俺は不幸なのかそうではないのか

人にそれを問えば不幸だという

しかし俺は何の不幸にも見舞われていないし
そう思ったこともない

なぜなら俺の家族のほうがずっと不幸だ

幸せが相対的なものなら俺は絶好調に幸せだ

俺は人と目を合わせることが出来ない

自分より立派な人間と出会うと少なからず緊張するだろう

俺は最低な人間だからそれはすべての人に当てはまる

つまり人としやべったりできないのだ

話しかけられれば冷や汗が出る

目が合えば腹が痛くなる

そしてしゃべろうとするだけで吐き気が出るのだ

何かきつかけがあったわけではない

気付いたらこうだった

よく分からない人もいるかもしれない
例を挙げよう

あれは中学の時新任の先生の言葉だ

「はい、深見さん例題8を解いてみてください」

おれは吐いた

このレヴェルである

そして妹以外話しかけられないので訂正できないのだが
おれは深 見一樹だ

わざとか、俺のクラスに妹がいてそいつのみよじが深なんだから察
せよ

だが捨てる神あらば拾う神あり
そんな俺にも唯一会話できる相手がいた
妹の陽子である

口癖はドラゴンパンチ

双子の妹で明るく友達も百人できていてもおかしくない
彼氏はいない作らせない

もし妹に告白でもしてみろ毎日画びょうを靴に入れてやるかな!!
彼女が笑えばみんなもつられて笑ってしまうような笑顔を持っていた
可愛くうへえと笑うのだ

俺のこの暗すぎる性格は初め誰も気づかなかった
陽子とはよく話していたし

何か言うときも陽子がお兄ちゃんがぐって言うてるー
と俺の代わりに喋ってくれていた

初めに両親が異変に気付いたのは
小2の夏陽子が友達のうちに行ってるときだ

その時まだ小さかったので覚えていないが
夕飯が何かいいか聞いたという

いつもは陽子が言っていたし好きなものだけは似ていたので
それでうまくいっていた

しかしその日は陽子もいない
いっこうに返事もしないことに不審に思った両親
もその時は何も言わなかった

しかし目も合わせない
そして両親は自分たちが話しかけられたことがないと知ると
母さんが「ちょ、おま、ちょ」といつて
急いでカウンセリングに連れて行ったらしい

しかし話しかけられればお腹が痛くなり
話そうとしたと思えば嘔吐するのでは何もできない

カウンセラーも

最終的に鬱になってしまった
話しかけることに吐き気をもようされたらかなりくるものがある

しかし陽子は違った

親からも変な子が生まれたと嫌な顔をされるようになったのを

自分のせいだと言い張り世話を焼いてくれた

俺の自室に監視カメラがあるのはそのためだ

いまだに何のためかはわからない

そのおかげで話しかけられても吐かないぐらいに成長した

しかしそれでも限界がある

親に愛想をつかれるのも時間の問題で捨てられると考えた

その日から俺はいい子になった

何か人が困っていればその困っている内容を盗み聞き

こっそりと準備をして助けるのだ

友達などできるわけではないが学校に行き

そこでも誰かが困っているとこっそりとその内容を聞き
手伝っていた

そのおかげで評判も悪くはなかった

先生にも気に入られ（頻繁に手伝いをしていた）

病気だからみんな話しかけないようにという

聞きようによつてはクラスぐるみのいじめだが

俺にとって最高のフオーローもしてもらえた

自分の耳が異常にいいと知ったのはこの頃だった

この耳のおかげで親の要求をいち早く知ることが出来
情報収集も容易で人と話さなくとも困らなかったのだ

親からもお前は人の顔色を読む天才だな
と言われ家の中で地位を確立した

だが本当に気の休まるのは陽子といるときだけだったし
俺たちが大きくなっても仲が疎遠になることはなかった

高校も同じものに入った
同じクラスだといいねと言ってくれていた
そんなときだ陽子は病気にかかったのは

心臓の病らしい
だがお金さえ払えば意外と簡単に治るものらしく
みんなほっとした

しかしその帰り道交通事故が起きた
俺たちの乗った車だった

その時のことはよく覚えていない
目が覚めたら病院だった
けがはなく一日で退院できた

話を聞くと
飲酒運転をしていたトラックに正面からぶつけられたらしい
しかし運の悪いことに犯人はそのまま逃げてしまい
父は足をけがして

全治二か月だといひ渡された

あまり大したけがではなかったと父は笑っていたし
病院に縁がある日だと笑っててもいた

しかしそれから散々だった

家に帰れば家が荒らされていて
貯金もなにも残ってはいなかった

母はそれを見て陽子はどうなるの！と叫び寝込んでしまった

俺には慰めることもできない
声をかけられないからだ

陽子はそんなことがあったというのに笑っていた

そして俺の顔を見て泥棒なんてしないでね
私はこのままでもいいからと俺にやさしい言葉をかけていた

俺は妹のために泣きたかったがなぜか涙が出なかった

変わってやりたいとも心の底から思えたし
陽子がいな世界に俺の居場所はないとも思った

そんな時神の選択から呼び出しを受けた

神様の選択ってやつは

正直自分にはどんな仕事も勤まるとは思えない
だがしかしやらなくてはならない仕事ってのがあ

妹を殺してはならないのだ

どんな仕事でもやるしかない

この国で人は一つの職業にしか就けない

神の選択というシステムがこの国を回しているからだ

母はスーパーのレジ打ちだが寝込んでいるし

とび職である父はけがが治るまで仕事はできない

あれ俺ここで結構いい仕事見繕ってもらはないと飢え死にしないか？

神のシステムってのはコンピューターのことだ

高度な計算からその人の外見仕草から性格を読み取り

その人の最適な職業を選択する

それにはどんな人も逆らえない

国王の息子だって才能がなければ

クリーニング屋になることだって稀じゃない

そういえばこのまえ隣の家のよったんさんが勇者になったな
一体どんな仕事内容なんだよ

俺は神社で願掛けをした

神と名のつくシステムなら神頼みしかないと思ったのだ
妹のため、しいては自分のためだが何とか少しでもおおくお金がほ
しかった

どうしても人と目が合ってしまい

なんども気持ち悪くなったがサングラスで

目が合わないようにすることでしたどり着くことが出来た

ただあいつのサングラスなにあれという陰口
を言われた

耳がいいから街に出るといゝんなことが聞こえる

助けてー変な人に追っかけられてるー

とか強盗だーとか万引きだー襲われるーとか

誰も聞こえておらず平然としている中で

俺だけはその声を聞き取れる

つてか物騒だなこの町!!

やはり初対面の人だと目が合うだけできつい

何度かあつていれば目を合わせても少しなら大丈夫なのだ

いま俺は神のシステムの前に立っている

先ず小部屋に通された

そこには

警備員さんと

神のシステムそのものがあつた

どうやらサングラスは外す必要があるらしい
警備員さんには筆談で目をつぶってほしいといった

かみのシステムは

大きな箱というイメージだ

真っ黒で異様な雰囲気がある

このコンピューターが膨大な計算をすることで
その人の適性に合った仕事をはじき出す

カメラが俺のことをなめまわすように見る

コンピューターの中で

はじき出された職業は無職

国から支援の必要最低限の補助を受け生活するだけの職業

そう、挨拶もろくにこなせない俺に適する職業なんてなかったのだ

警備員さんの話

私は神の選択で仕事をしている

神の選択の前でその人が職業をもらうのを見張る役目だ

今私は目をつむっている

今職業をもらっている人が対人恐怖症らしくサングラスをとれないらしい

だがそんなものの着用は認められていない

そのままの顔で神の選択の前に立たなくてはならない
神の選択に誤差が出ては大変だからだ

前例はないが目をつむってあげることにした
なんでも彼は人の視線を感じるだけでも体調が悪くなるらしく
可哀そうだと思つてのことだった

しかしいつまでたつても終わる気配がない
いつもならこのぐらいで職業の書いた紙をわたされ
神の選択の前から立ち去るはずだ

目を閉じたまま理由を聞いても返事がない

6年務めてきたが

私が神の選択がエラーを起こすのを見るのは初めてだった

決心

そして俺はある決心をした
他人にとってはなんでもない決心かもしれない
うまくいかないかもしれない

だがけして妹を殺してはならない

俺は神の選択の隣で目をつむっている警備員さんに話しかけた

「すいません、機械が反応しないみたいですけど」

試したことはなかったがどうやら

人と話すとアレルギーのような感じで

血を吐くように俺の体はできているみたいだ

そして俺は喉から血があふれるのを感じながら
倒れていく

だが口は絶対に開かない

一滴でも血を吐くことは許されないのだ

決意のために

そう俺は知っていた

神の選択にもエラーってのがまれに起きる
職業を書いた紙が出ないことがあるそうだ

そんな時仕方なく人が職業を決めるらしい

やはりコンピューターも万能ではないのだ

俺はそれにかけた

> 浅日さん<

俺は何とか立っていた

人と言葉を交わした後遺症だ
頭がずきずきする

ほほを濡らす俺を見て

安心して職業はもらえるからと
警備員さんは言ってくれた

白い建物に通されココで職業を決めてもらえるらしい
扉を開けると

女の子が机に座って漫画を読んでいた

妹も持っている漫画で題名は江戸時代で目からビームをだ
なぜ人気があるのか理解できない

こちらに気付いた少女は浅日というわと自己紹介してくれた
俺は来る前にもらった職業希望書という紙に

話せないということと職業はなるべく人と話さない
ものがいいと書いておいて渡した

陽子なら絶対に浮かべることのないような邪悪な笑みを浮かべて
「じゃあ私の助手になるのがいいわ、ちよつと待っていて」

この誘いに乗ってはだめだと俺の頭が警報を鳴らす
それに最低でもお前とは話すようじゃないか

「私のお金じゃないし好きなだけ報酬は出すわ」

俺は本当かと顔を上げた

癖ですつと下を向いていたのだ

だから状況をうまく判断できていなかった

声から女の人だとわかつてはいたが

思ったより小柄で少女といった感じだそして美しかった

腰のところまである白髪

透き通るような黒い瞳

なぜか頭にウサギの人形が乗っている

これで邪悪な笑みを浮かべていなければ

二つ返事で世話になっていただろう

しかしどんなに渋ってもこの子の決定は絶対だろうと思わせる何かがあった

そうだ俺が俺として生きるには
受けるしかない

もしかしたら全然たいしたことないかもしれない
所詮子供のする事なのだ

そう思ってた俺を叱りたい

名探偵たち

> 真実 <

「ねえ紙つておいしいのかしら」

いきなりの話題変換

普通なら意味は分らない

しかし俺は違った

ばれているのかいやそれなら俺はここにはいないはず
泳がされた？なぜ

「もしかしてあなたなら知っているんじゃないかと思って」

「ここから私が出ることはできない

でも E R E E R の人の個人情報送られてくるの」

「あなたには特殊な能力も測れないほど大きな能力もない
E R E E R が出るはずないのよ」

やめろ、やめてくれ

「でも持ち物検査は出るときに行われる
機械を壊したとは考えにくい」

俺は終わったと思った

しかし次の言葉は予想していなかった

「取引しない？」

>取引の内容<

「私さここに閉じ込められているの」

話の展開についていけない

「さびしくない？」

知らない

「つれないことゆうなよー」

心よまれた！

「家族ってものがほしいの」

「そうすれば神の選択でしたことは黙っているわつかまるわよ？」

どうやらこいつはすべて分かっているようだけれど、しかしこの話の流れはなんなのだろうか

「私を妹にしない？」

突然の提案

頭が真っ白になる

「俺には、もう、妹、は、いる」

何を言ってるんだ俺は

それまでの場にかなり飲まれていたこともある
相手が俺の目をずっと見ていたこともある
きつと頭がおかしくなっていたのだ

あ、俺、人としやべってる
きずいた時にはもう遅い

意識が遠くなる

ぐはつと盛大に血を吐いた
飲み込んだ、神の選択が出した無職に認定すると書いてある紙と一
緒に

「、、、、私の真っ白なドレスが真っ赤になったわ
というより大丈夫かしらこの人」

「そついえば妹は間に合ってるという話だったわね
なら恋人しか残ってないじゃない」

>妹陽子の様態<

私は心臓の病気で手術をしなければもう命が危ないそうだ
さらにお金が絶望的にないらしい
しかし私の憂鬱の原因はそんなことじゃない

今日はお兄ちゃんが来なかったと何度も吐いた溜息をまた吐く
毎日来てくれていたのに

嫌いになってしまったのかと心配になる

昨日リングをウサギみたいに切つてと無理な要求を言ったのが悪かったのか

それとも私のことが重荷となつてしまったのだろうか

どんよりと空は暗くすきな漫画も面白くない

そもそも江戸時代にビームなんて出せるはずがないのだ

お兄ちゃんのいない世界は何も楽しくない

もう私は死んでしまおうかと思つた

命が助かる見込みがないと知っている

それにお兄ちゃんに嫌われてまで生きようとは思えなかった

仲のいい看護師さんが入ってくる

ここに来るのは同情からかと暗い思考が脳をかすめる

「元気？」

そんなわけないだろ今日はお兄ちゃん来てないんだぞと思つたが
日ごろの癖でうへえと笑う

そつえばいつも笑っているのがかわいとお兄ちゃんは言っていた

「相変わらずきもい笑い方だねーはい、手紙届けに来てあげたよ」

ひつれいな奴だなと思つたが手紙のほうが気になつた

やっぱりお兄ちゃんからだった

看護師さんがいなければひよっほーと叫びたい気分だった

嫌われてなかったと安堵した

そうだよ嫌われるわけないじゃんと思い直す

世の中希望であふれてる

「じゃ、私は行くから」

看護師さんが帰った後にやにやしなから封を開ける

三枚の手紙と通帳とハンコが入っていた

一枚目の手紙には仕事みつかった。日給この通帳に入れるから病院に払ってくれと書いてあった

そのあとの文字が読めない
なぜかにじんでいるのだ

二枚目も三枚目も同様で
でもお兄ちゃんが手紙を書いてくれたのが嬉しくて

どうやらオレンジジュースをこぼしたらしい

オレンジはお兄ちゃん嫌いなはずなのに

そもそも濡れた手紙をそのまま出すだろうか

きつとオレンジジュースをこぼした別の誰かがいるに違いない

もしあったらただじゃおかない

生きた内に合う確率はほぼないと思うが

驚くことに通帳には2000万はいつていた

手術は成功した

一体お兄ちゃんは何の仕事を始めたのだろうか

初仕事

さて、給料を前借したら2000万振り込まれた。
どんなことをさせられるのかと内心びくびくだったが、
この一か月、何の音さたもない。

ただ、このウサギをかぶった、少女と、
その、同じ部屋で寝泊まりしながら、それ以外何もしていない。

ただ事あるごとに話しかけてくるのは、気がめいる。
別に嫌いという訳じゃない。そもそも俺が嫌いになっていい人間な
どいない。

自分が嫌いつてわけじゃないんだ。
他の人たちがまぶしいすぎるくらいで。

「おはよう」

これだ

顔をくいつと傾げて、あいさつしてくる。
やっべ可愛いと思う。そのぐらいの普通の感覚がある。

しかし、俺にはこれは重過ぎる。
毎日これをやってくるので、週二にしてくださいと
毎日手紙を書いて机の上においていたら、
机の上がその紙だらけになってしまい、
怒らせたことがあった。

一日中質問攻めにあい、彼女の真つ赤なドレスが5枚ほど増えるまでやめてもらえなかった。

今日こそは返そうと思う。挨拶を。

なぜなら、もし挨拶を返したら、週二にしてくれるらしい。

「お、くはっ」

彼女の赤いドレスがまた増えた。

「私その挑戦する姿勢、偉いと思うわ。ただ今日はあなたの目を見続けるから。」

待ってくれ、お、まで言えた！

これは小1時間ほど弁解したいが、俺にはしゃべることさえできない。

もうお腹痛い、目が合っているわけじゃないんだが見つめられていると意識するだけでもきついのだ。

「あ、そういえばやっとダー、あなたに、やってもらわなくてはならない仕事が出来たわ。」

今のはダーリンというのを言い直してくれたんだろう。これを言われて、気絶させられた。否、した。

だが、この仕事に絶望する。最も俺に向かない仕事だった。

「この人と友達になってきて。」

鬼か――

俺は心の中で絶叫することとなった。

「安心して、私のこの灰色の頭脳が、
あなたに、このミッションを可能にする
エレガンスなアイテムを用意したわ！」

なぜかテンションが上がりまくりだな。
いやだな、陽子が俺を女装させようとしたテンションに似ている。

だが、ここで仕事を断るのは気が引ける。
やらねばならないだろう。

「はい、これはデータよ。」

紙をわたされる。

写真はひげを蓄えたちょい悪おやじって感じた。

童心 俊三

職業 殺し屋

好きな食べ物 なんと

そこまで読んだ。

無理だ。殺し屋はない、そもそも友達が一人もいない俺に
この仕事は、きつい。何より殺し屋と、友達になれる人間がどのく
らいいるんだろうか。

いや、いるんだろうがそれは俺じゃない！

「あ、間違えちった。」

てへつと舌を出す。こいつわざとか。

だが安心だ。今なら殺し屋以外誰とでも友達になれる気がする。もしかしてそんな効果が出るように配慮してくれたのだろうか。

大神 緑

職業 高校生

好きなもの イルカ

趣味 勉強

ここまで読んだ。

やつは無理じゃん。女子高生とか。

ははっ死のう。

俺の様子に何かを感じ取ったのだろうか。

あわてて段ボールをトコトコといった足取りで運んでくる。

「あ、安心して。アイテムがあるのよ。

コンピューターもこのアイテムさえあれば大丈夫と出ているわ。」

（実際はまして表示されただけなのだけれど。）

かつこの中の言葉は気を使って小声になったのだろうか、俺にはどんなに小声でばそつと言った言葉でも聞こえなかったということはない。

俺は、ウサギの着ぐるみと被り物を手に入れた。そしてある公園に放り出された。

「あのさ、ウサギさんだよね。」

緑の髪の毛の女の子だ。

ショートヘアが良く似合う。

前髪が一房だけ肩まで伸びていて、かわいらしい。

「わたし、大神緑です。

その、よろしく。」

えっこの子マジで高校生か？

何故そう思うのかというと、ちっこい。

小学生としか思えない。

そんなことを思っていたら、ふふふふふふと笑いだした。

「やったー」

「自由だーーーーー」。

女の子は分からない。

俺は驚くべきことに、童心 俊三さんのほうが良かったかもしれない
と思い始めていた。

キャストオフ

俺は耳がいい。

だから、俺のその一応、彼女になるのか、浅田香美さんが何をしたいかはわかっている。

別に詮索などしてはいないし、そんな事をするつもりはなかったのだが、

癖というものはなかなか抜けないもので、彼女の独り言、これは彼女がたくさん独り言を言うのも悪いのだが、聞いてしまった。

夜になってソファに寝ていると隣の部屋でふふふと笑いながら、彼女の壮大な計画が聞こえてくる。

彼女が何者でどういう人かはわからない。
しかし何がしたいのかは分かった。

——世界征服だ——

俺のこの行動が何になるのかは解らない。
しかし、できるなら協力してやりたい。

本当に世界征服してしまうのかどうかは知らないが、
妹の命の恩人のために何かしたいというのが正直なところだ。

たとえ役に立たなくとも精一杯やりたい。
それが人情ってやつだ。

それに、それは男の夢ってもんじゃないか。
俺はこういうのに弱い、夢とか野望とか縁がなかったから。
だってかつこいいじゃないか。

「私ね、初めて商店街にきたよ。」

いきなり話しかけられたのであたふたしていると、
紙とペンを渡された。

「いや、ウサギさんは着ぐるみだから話せないんだと思って。」

「「ありがとう。」」

さっそく書いてみた。

喜んでもらえたようで、くるくると周りをまわりながら、

「好きな食べ物は何？」
と聞いてきた。

好きなものなどない。

みんなはこういう質問が来たら、なんて返すのだろうか。
だがこんな話題、振られたことがないので困る。

「むむ、こういう質問は困るかな、じゃあ天気の話しない？」

天使か！

表情など解らないはずなのに、優しく気遣ってくれる。
少し泣けてきた。

あと、この着ぐるみつてのはなかなかいい。

相手が俺の目を見るようなことはないし、何より音がばやけて聞こえるので、

テレビみたいに話しかけられているという実感が薄い。

それでもとからよく聞こえる耳を持っているので聞き逃す心配もない。

こないないものがあるのなら、日頃からつけていればよかった。結構本気でそう思う。

「私は今日みたいな曇りの日が好きだなー。」

ちらつちらつとこちらを見てくる。

「雨が好き」

と書き込んで見せる。

「なんで？」

しまった、相手に疑問を抱かせてしまった。俺が問いかけて話させるというのがいいのに。

だが答えなくてはならないだろう。

難しいミッションだが生きて帰ってくるぜ。

「みんな外に出たがらないから。」

「んー、ん？」

なんか、完全に墓穴を掘った気がする。

まぶしい、その興味の塊のような瞳がまぶしい。

二時間たって、土曜日の十一時半、質問攻めにあった後、何とか俺は立っていた。

お腹へった。という言ってきたので

手ごろな軽食店によったところ、

こ、これがハンバーガーかあと、いきなり大声を出された。

顔を真っ赤にして、そのウサギ貸してと言われたが断った。

すれ違うカップルから、何あのウサギと言われる。

今度は彼女にも聞こえたらしい。

実は、道行く子供ずれからウサギさんだー、見ちゃだめよってやり取りが、

かなりあったが、小声だったので気付けるのは俺ぐらいだろう。

いや、ウサギの格好をしている時点で、こうなることは分かっていた。

だがテンパっていたのだ。

それにしても彼女は大丈夫なんだろうか。

面白いと言ったら失礼かも知れないが、トマトみたいに真っ赤になっている。

「うう、ねえそれって取れないの？」

潤んだ目をお願いされる。

ドキッとした。

上気したように見える頬、背が小さいので自然と上目使いにもな

っている。

途中から純粹に楽しくなってしまうて忘れていたが、彼女と仲良くなるのが目的だった。

友達が困っていたら助ける。

これは基本だ。

俺も仲良くはなりたいたい、ずっと友達はほしかった。

妹に手伝ってもらって友達を紹介してもらったことはあるが、まったく、長続きはしなかった。

最高友達時間、二日。

律儀にも二日目にはもう無理だわ、と言われ友達はいなくなった。

本当に律儀な友達だった。

その日の帰りおにちゃんには私がいるからと陽子に慰められた。

今度はあのようになりたくない。

喋ったらまた血を見ることになるだろうがやってやる。

どんとこいだ。

俺はウサギの着ぐるみの頭の部分をとった。

「え、お、男の人だったの？」

なぜか、さつきよりも顔が真っ赤になった。

コーヒーショップ

気まずい。

俺はコーヒーショップで大神さんに頼んでもらった、
コーヒーを飲んでいた。

ハンバーガーショップでも、何も言わなかったのに、
俺の分を用意してくれたし、すごく気の利く人なのだろう。

それだけに申し訳ない。

今、テーブル席で向かい合って座っているのだが、
顔が真っ赤のまま下を向いてしまっていて、
もうかれこれ30分は経っているんじゃないだろうか。

彼女の前にもコーヒーが置いてあるが口はつけられていない。
おいしいのに。

従業員の人がああ男の人、女の子泣かせてない？
と言っているのが聞こえるし、そろそろなんとかしないと、と思い、
なぜ固まっているのかと聞いてみた。

まあ、そう書いた紙を差し出すわけだが、
うつむいたままなので気付いてもらえない。

困り果てていたのだが、いきなり大神さんが角砂糖をコーヒーに入れたした。

そして7つ目の角砂糖を入れ終わった後、スプーンでかき混ぜ、一気に飲み干した。

甘くないのだろうかと思ってみると、

「に、苦い。」

苦いのだそうだ。

コップをドンと机に置いた後、深呼吸をして

「あの、よかったですねいんですけど、

その、下も脱いでく、くれませんか！」

一気に喋ったからだろう、肩で息をしている。

ここの従業員さんが、盛大に噴き出した。

合格

そんなこんなで、俺は下を脱いだ。

勿論、ウサギの着ぐるみだ。

着替えるといつても下にジーパンとＴシャツを着ていたので、それをただ脱ぐだけだった。

着替えてる最中にも、なんで私気付かなかったんだろう。そつえば最初からなんかいろいろおかしい。と小声でぶつくさと言っているのが聞こえる。

従業員さんはまだ笑いをこらえている。

お客様は神様ではないのか。神様を笑うのはどうなんだろうか。

「そ、それじゃあ、始めます。」

席に戻ると、新しいコーヒーが用意されていて、唐突にこう切り出された。

このコーヒー、あの従業員さんが入れたのだろう、少しこぼれている。

「わ、私は合格でしたか？」

よく分からない。なんのことか、そう思っていたらつケータイに着信が入った。知らない番号からだった。

まあ知っている番号なんて、家族のものだけなんだが、俺の耳はいい、耳に押し当てなくとも、携帯の声が聞こえる。

それなら失礼にならないだろうと、通話のボタンを押した。
「もしもし、こちら香美ちゃんです。」

香美ちゃんですか。

「合格って言っていていいわよ。」

どういうことだが本当にわからない。
しかし、合格なら悪い意味ではないだろう。

合格と紙ナプキンに書いて渡した。

もうすでに、もらったメモ用紙は使い切っていたからだ。

「ほ、本当ですか。信じていいんですね。」

「大神さんに代わってくれない？」

電話を渡した。

彼女の声を聞いたら大神さんは本当に嬉しそうに何度も、お礼を言っていた。

そう、何度も。

「今日からよろしくお願いします。一樹さん。」

こいつもか、しかし俺は香美さんが俺の名前をこう教えたのを知

つている。

マイホーム

明日迎えに来てくださいねーっと思前にもコーヒーショップの代金を、

俺の分まで払って帰って行った。

本当に不思議な子だった、ずっとテンパリ気味だったので冷静に考えていなかったが、今考えるとハンバーガーは食べたことなさそうだった。

そして、俺のウサギをはじめは受け入れていたと思う。

つまりは、世間知らずってやつだ。

しかし、女子高生だぞ？ いや待て待て待て、明日迎えに行くよ
うなのか？

まあそこらへんは、あとで香美さんに聞けばいい。

人のものを聞くのか…、なかなかの難易度だぜ。

帰るか…。

そういえば妹は大丈夫なんだろうか。

あれから連絡もしてない、それに居場所は教えてはならないと言われているので、

連絡も来るはずがない。

別にお金がちゃんと妹の元に行っていないのではないかなどと、疑っているわけじゃない。

ホームシックってやつだ。

純粹に会いたい。これはだめだろうか。

メールで香美さんに連絡はした。

実にメールってのは便利だ。

共通語がメールになればいいのに。

そして俺は、陽子に連絡を取った。

そして俺は一か月ぶりに家に帰った。

「陽子？」

俺は陽子にだけしゃべれる。なぜかは知らないが。

「キターーーーーー。」「

そんな俺の一言は陽子の絶叫によってかき消された。

ロリコン

「お兄ちゃん、何の仕事を始めたの？」

久々の我が家なのだが、俺に積もる話などできる筈はなく、いつもどおり陽子が話し続けるという形だったのだが、ついに俺が話す番が来たようだ。

「おう。」

「ふむふむ、いや、おうってどんな仕事だよ！！」

時間になったので帰ることにする。3時間ほど陽子が話し続けたのでもう暗い。行きと同じくバスに揺られ、860円のバス賃を払って扉の前に立つ。

ノックはしたほうがいいんだろうか、そもそもこれがどういう仕組みで

開くの書かが解らない。いつもは押しても引いてもびくともせず軟禁状態なのだが、今日俺が出るときは自然に開いていた。

どういう仕組みで開くのかわからないのだ。

中から声がする。

大神さんの声だ。

何故だろうか、声なんてするわけないのに。もしや俺は意外と重症なのか、

彼女の笑顔にやられたのか、そして俺は小さい子が好きなのか。

手が汗でべたつく、これは、、

俺が人生に挫折しそうになった時、ドアが唐突に開き、大神さんが出て行った。

大神さんは笑いをこらえていた、深くフードをかぶっていて、表情など解らなかったが、

俺には聞こえた、クックと笑ういう声が、何か面白いことでもあったのか、

しかし、どこか恐ろしい笑い方だった。

香美さんがどうしたの、と聞いてくる。

ドアの所で突っ立っている俺を不審に思っただろう。

それはとても心配そうで、優しい声だった。

俺は何も知らないこの世界の仕組みを。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6877y/>

神の選択

2011年12月25日16時46分発行